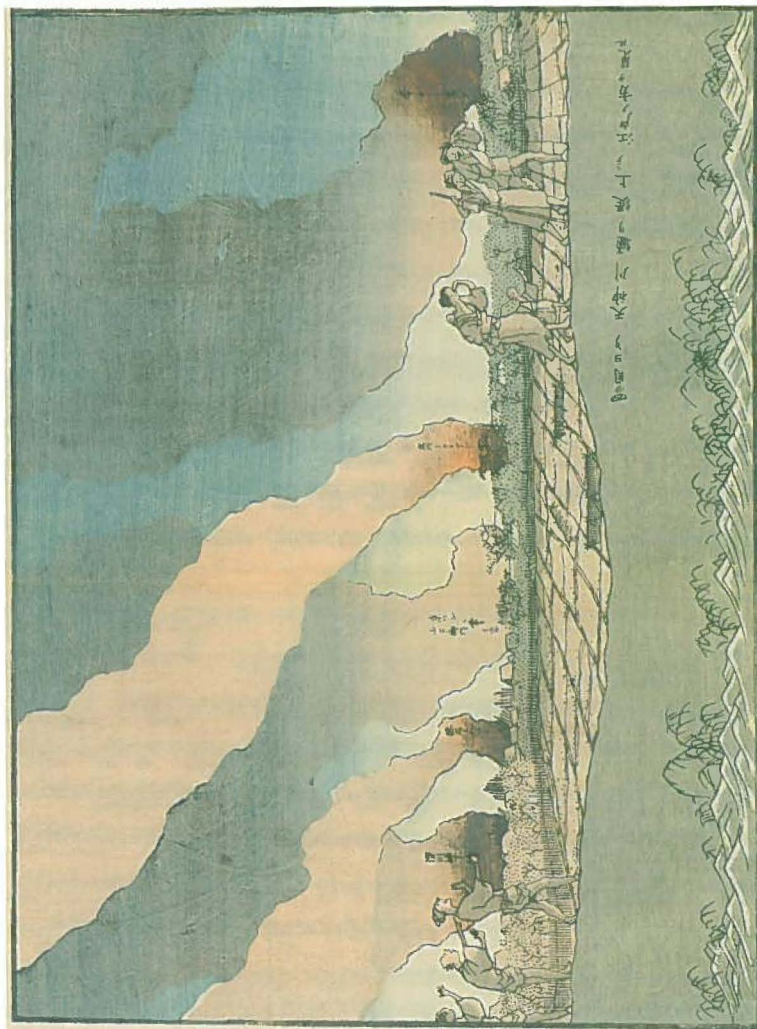




四つ目より天神川通り堤上にて江戸の方を見る (株) 阪本企画室 蔵)

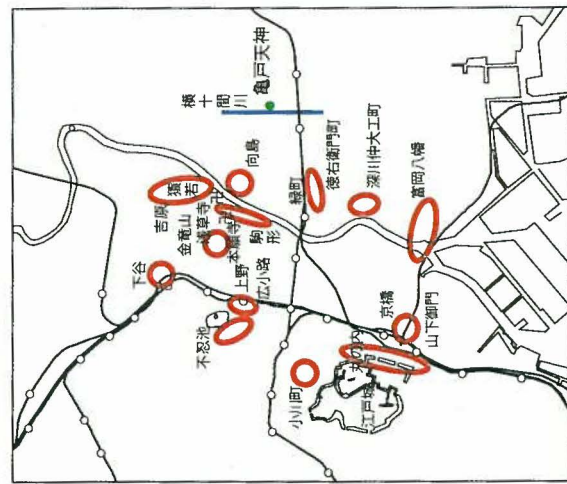
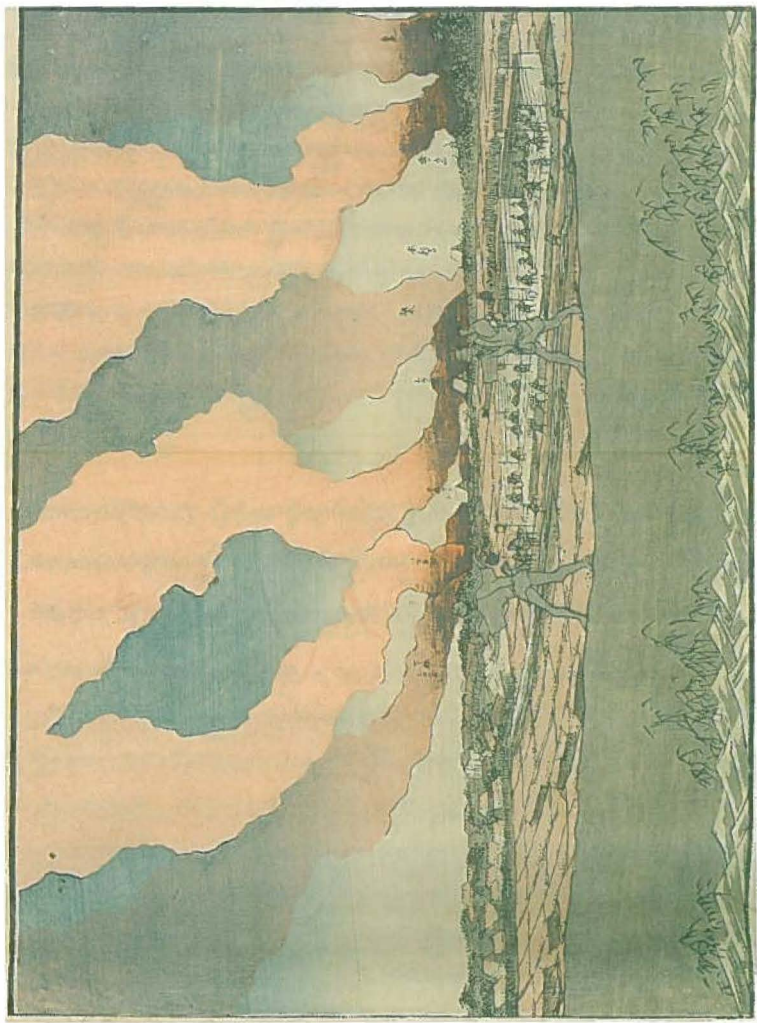


図1 およその火災発生地域



安政江戸地震は、幕末の安政2年10月2日(西暦1855年11月11日)の夜四ツ半時(23時ごろ)に、江戸付近の直下を震源として起きた地震である。マグニチュードは7.1程度であったと推定される。

この地震によって、当時江戸に1,000余りあった町人町のうち、473の町で合計4,626人の死者を生じたことが『破窓之記』に記録されている。これは町人の死者数で、江戸の居住地の約70%を占めた武家屋敷地内の死者数は含まれていない。このほか、寺院内の死者も相当数あったはずで、この地震による江戸市中全体の死者は約1万人に達したと推定される。

幕末の戯作者として有名な仮名垣魯文の編による『安政見聞誌』(全3巻)には、安政江戸地震の有様を示す多くの絵図が載っている。その中に「四つ目より天神川通り堤上にて江戸の方を見る」という絵図がある。本文としてつづられたこの絵図の説明文に次のような記載がある。

『亀井戸住玉蘭齋(ぎよくらんさい)、今度の急変を逃れ、同所天神川の堤より江戸の方を見るに、四方遠近(しほうおちこち)に火災起り、家蔵瓦等の崩る音は再震動出るかと思はれ諸人安き心もなき体を見る儘(まま)写真せしをここに出す。』

この絵を描いた玉蘭齋は、本名を橋本兼次郎といい、文化4年(1807年)下総国布佐(千葉県我孫子市)の生まれである。浮世絵は歌川国貞に師事し、若い頃は美人画や役者絵を得意として、歌川貞秀を名乗った。安政文久の幕末期には、西洋画手法を取り入れて横浜絵、あるいは開花絵とよばれる細密で写実的な風景画を数多く残している。

この文にある「天神川」は、現在は墨田区と江東区の境界線になっている横十間川のことであり、亀戸天神のすぐ西側を北から南へ流れていた。

安政江戸地震の直後、おおむね震度の大きかった場所が火事の発生点となり、江戸の各所で火災が発生している。中村操(2003)は、この地震の古記録から火災の発生場所を特定し、現代の東京の市街地図の上に表示した。この原図に基づいて、およその火災発生地域を図示すると図1が得られ

る。図1では横十間川を青線、亀戸天神を緑の点で示している。玉蘭齋はおよそこの緑点の位置にいて、この絵を描いたのである。

絵図では、描かれた煙の柱と、細字で書かれた地名の注記の正確さに驚かされる。一番左の煙には「深川仲丁」と書かれているが、正しくは「深川大工町仲丁」であって、深川明神があるあたり、地下鉄半蔵門線清澄白河駅付近に相当する。富岡八幡・永代橋付近の火災の煙柱は、図の左端の外側に当たっていたはずで、図には描かれていない。

図の左から2本目の煙柱には「徳右衛門町」と書かれ、現在のJR総武線両国駅の東側の地域で、緑町と合わせて1つの火災地域となっていた。左から3本目の煙柱は「京橋・山下御門」と書かれ、現在の東京駅南端から東に広がっていた街区である。煙には横の拡がりがあり、現在のJR東京駅西口の丸の内、大手町の軟弱地に広がった火災区域全体から発する煙であろう。その右隣の煙柱には「緑町」とあるが、徳右衛門町の西隣の街区で煙柱は別個に立っていたのでであろう。「本丁河岸に見ゆる」と注記された煙柱は小川町(現在の神保町付近)の火災によるものでであろう。絵図では以上が南側半分に描かれた煙柱である。

北側の煙柱は幾本かが大きく一体化して描かれている。「シロコウジ」は「上野広小路」であって、ヒとシを混同する江戸弁の発音が反映されている。「本願寺」は現在の地下鉄銀座線田原町駅の北側にある本願寺、「金リウ山」は浅草寺の山号である。図の一番右端は吉原の遊郭の煙であって、四方堀で囲まれていて逃げ場を失い、中で多くの遊女が焼死した。

以上、この図の写実性は正確無比である。日本画というと、鉛筆のようにとがり出た富士のような、極端にデフォルメされた絵を思い描く人が多いであろうが、このような、見えた光景にあくまでも忠実に描かれた絵図もあったことに改めて注目しておきたい。

都司 嘉宣

(独立行政法人建築研究所 特別客員研究員)